



「黄熱病」って、どんな病気なの

野口英世博士がたおれたことで知られている

「黄熱病（黄熱）」は、アフリカ西部や南アメリカにみられる、悪性の伝染病で、病原体は黄熱ウイルスです。病原体を力が運び、伝染する病気です。

「黄熱病（黄熱）」にかかると、とつぜん、ぞくぞくする寒さ（悪寒）を感じたり、ふるえたりして高熱を出し、頭痛やこしの痛み、手足の筋肉痛が起こります。

そして次には、血液の混じった黒色の物をはき出したり、鼻の出血や、皮ふねん膜の出血や黄だん（たんじゅうの黄色い色素が、血液中に多量にたくわえられるため、皮ふやほかの組織が黄色くなる病気）などが起こります。

日本では発生したことはありませんが、野口英世博士が、アフリカで「黄熱（黄熱病）」の研究中に病気になり、たおれたことで知られています。

「黄熱病」を防ぐには

「黄熱（黄熱病）」には、特に、ききめのある薬はありませんが、なおれば、体に免疫（体内に病原体が入っても発病しない）ができるため、一生かかることはありません。

また、予防には黄熱ワクチンを注射するほか、かん者を一般の人からはなしておいたり、力を退治したりします。

予防のための黄熱ワクチンは、日本の場合には、アフリカや南アメリカなどへ行く旅行者に、出発前に注射しています。（監修・保志 宏）

